

〈知的・自閉症・情緒障害教育〉

生徒同士が互いに学び合える授業の工夫

— アクティブ・ラーニング型授業による社会科の実践を通して —

沖縄県立島尻特別支援学校教諭 久 場 研 幸

I テーマ設定の理由

国立特別支援教育総合研究所（以下、「特総研」とする。）の報告（2010）において、軽度知的障害を有する生徒の数と割合が「全国の特別支援学校の高等部で特に増加している」ことが指摘され、軽度知的障害を有する生徒の増加の実態と教育的対応について特別支援教育の充実強化の必要性が提言された。沖縄県立島尻特別支援学校高等部（以下、「本校」とする。）においても同様に療育手帳区分で軽度認定の生徒が増加傾向にあり、今年度の全生徒に対する割合が3割弱となっている。

軽度知的障害のある生徒にとって必要性の高い指導内容について、特総研により整理と分析が行われた。「特別支援学校（知的障害）高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究」（2012）である。その報告書では、「対人コミュニケーション能力」、「社会生活のルール」、「基本的な生活習慣」、「職業能力の育成」の4つのキーワードを挙げている。社会生活や職業生活を送るために必要な能力と実践的な態度との関連において、各教科の学習内容を選択、抽出する必要性が指摘された。また、「特別支援学校高等部学習指導要領」社会科の目標にも「社会の変化、働きや移り変わりについての関心と理解を一層深め、社会生活に必要な能力と態度を育てる。」とあり、教科学習においても卒業後の社会的及び職業的自立を見据えたキャリア教育の視点から授業展開や指導内容を充実させることが求められている。

知的障害のある児童生徒の学習上の特性について、「特別支援学校学習指導要領解説」では、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことや、成功経験が少なく主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないこと等からくる生活経験の不足として、指摘されている。本校の在籍生にとっても、知識の定着と般化を目指す、効果的な授業の工夫が必要である。

2015年、文部科学省教育課程企画特別部会「論点整理」（以下、「論点整理」とする。）のなかで、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）」の必要性が提言された。鈴木建生（2016）は、「アクティブ・ラーニングでは、ペアワークやグループワークを行うことによって、お互いに自己存在感を高め合い、役に立っているというポジティブな感情を味わって、自己肯定感が高まります。」と主張している。学習上に特有の特性を示す知的障害特別支援学校の生徒にとっても、協働学習による対話的な話し合い活動における学びの効果が期待できるであろう。

文部科学省の提唱するアクティブ・ラーニングの概念は、主体的・能動的に学ぶ学習活動として、従来の知的障害教育の分野でも重視されてきたものである。そこに、子供たち一人一人が、学んだことで、どのように成長しているか、より深い学びに向かう姿勢ができているか等进行评估する新しい視点が加わる。従って、仲間同士の楽しい会話だけでは不十分で、対話により思考を広げ深めることが必要となる。

そこで、アクティブ・ラーニング型授業で、個の学習から協働の学習、最後に個の学習で振り返りを行うというサイクルによる学び合いの促進を図りたい。生徒同士が協力・協働して課題解決に取り組む学習形態を作り出すことで、ソーシャルスキル、ライフスキルなど将来の生活を支える技術の習得が図られるであろう。更に授業のフィードバックにより他者との信頼関係や環境との相互作用を振り返ることで、自分自身の考え方や、成長に気付けるのではないかと考え本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

- 1 授業展開において、アクティブ・ラーニング型授業を行うことで、他者と協力できる力（社会的能力）の育成につながるであろう
- 2 授業のフィードバックにおいて、他者との協働や環境との相互作用を振り返ることにより、対話

的な学びが深まり、自らの考えが広がるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 アクティブ・ラーニングについて

(1) アクティブ・ラーニング型授業

「論点整理」によるアクティブ・ラーニングの概念は、「次期改訂が目指す育成すべき資質・能力を育むためには、学びの量とともに、質や深まりが重要であり、子供たちが『どのように学ぶか』についても光を当てる必要があるとの認識のもと、『課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び』について、これまでの議論等も踏まえつつ検討を重ねてきた。」とされている。具体的には、各教科等における習得・活用・探究の学習過程全体を見渡ししながら、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点から学び全体を改善していくことが提言された。

溝上慎一（2014）によるアクティブ・ラーニングの定義は、「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」とされる。アクティブ・ラーニングとは、「あらゆる能動的な学習」であり、それは「書く・話す・発表するなどの活動への関与」を意味している。そこで生ずる認知プロセスの外化とは、「何をどう学び、何を理解し、何を感じたかをアウトプットする」ことである。

これに対し、講義型（聴く）の授業はインプットと捉え、講義型の授業とアクティブ・ラーニングを組み合わせることを「アクティブ・ラーニング型授業」と位置付けている。インプットとアウトプットの両方が即時に行われる授業を理想とする。更に、アクティブ・ラーニング型授業の中で、個から協働、協働から個への学習サイクルを作り出すことの有効性も指摘している。個人の考えや思いを他人へ伝える（表現する）過程で思考はより明確になっていくと考えられる。

学習上に特性を有する知的障害の生徒にとっても本人の有する知識をアウトプットし可視化を続けることで知識の定着がはかりやすくなるであろう。その意味からも、アクティブ・ラーニング型授業での授業展開は有効であると考ええる。

(2) 本研究におけるアクティブ・ラーニング型授業

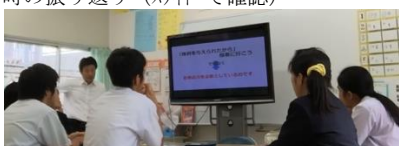
特別支援学校においても実生活に即した課題などでの動機付けを工夫しながら、興味、関心を引き出し、主体的・協働的な学習環境を設定することで、ゆっくりではあるが知識・技能の定着が期待できる。また、その知識を活用した問題発見・解決の場面を経験することにより、思考力・判断力・表現力の育成が図られるであろうと考える。本研究においては、知的障害特別支援学校におけるアクティブ・ラーニング型授業について考察していきたい。

授業構成については、アイスブレイク、説明、演習、振り返りという授業展開で、個から協働、協働から個への学習サイクルを繰り返しながら学習を進めていく（表1）。

- ① 授業スタート時に、アイスブレイクを導入し、場を和ませコミュニケーションをとりやすい雰囲気作りを行う。緊張感を解きほぐし、話し合い活動に積極的に関わってもらえるような素地作りが目的となる。また、主体的な学習への参加として、授業の個人目標の設定を生徒自身で行う。
- ② 説明部分を15分程度に抑える。学習内容の精選を行い、生活に即した具体的な事象などを取り上げて説明を行う。知識を教え込むのではなく、教材やテキスト等の資料の提供である。資料は、基礎・基本を押さえた内容に絞り込み、生徒が注目しやすいように単純化する。板書やノートへの書き写しはなるべく行わず、内容はワークシートで確認できるように準備する。板書の代わりに大型テレビへ表示することで、時間を有効に使う。
- ③ 演習を20分程度行う。説明部分で提供した資料を活用できるように、教師が問題となる課題を提示する。生徒はグループを作り協力して課題解決に向けての取り組みを行う。課題を共有しともに力を合わせる活動となるよう、教師が寄り添う。生徒それぞれの意見をホワイトボードに書き込み、可視化することで、グループとしての意見を作り出していく作業を協働で行う。最後にグループで話し合った内容について発表することで、他グループへの共有化を図る。
- ④ 振り返りを10分程度行う。まとめテストを行い、生徒同士で採点し合う。さらに、リフレクションシートに授業の感想を記入する。自分の内面に目を向け、授業に対してどのような態度で臨み、何を学んだかを生徒自身で考える時間となる。以上のように、4つのステップで授業を組み

立てていく。

表 1 授業構成（授業の展開例）

《 授業の構成 》 選挙を身近に感じよう② ～何を基準に投票するのだろうか～				
構 成	学習内容（生徒の活動）	工夫	指導上の留意点	準備物
導入 ① アイスブレイク 約 5 分	- はじめのあいさつ 「命令ゲーム」  - 個人目標の設定（個）	- グループ学習への素地作り - 緊張緩和、リラックス効果 - 個人目標の自己決定 - 目標の可視化（意識しやすくする）	- 健康状態のチェック - SSTスキルアップワーク - ルールが単純、分かりやすい内容であること - 教師の指示をよく聞き、行動する。 - 態度目標と内容目標	大型テレビ パソコン
展開 ② 説明 約 15 分	- 前時の振り返り（スライドで確認）  - 何を見て投票する人を選ぶだろうか？（個） - 重要な政策ってなんだろう？（個） 「あなたなら、誰に投票する？」（個） - 選んだ理由をグループで説明（協働） 「グループで選ぶなら、誰に投票する？」（協働） 	- 基礎基本を押さえて単純化 - 時々質問して、意見を聞く - 個人で考える時間と、発表し共有する時間をつくる - 個人で回答した内容や理由を基にグループで意見を述べる - ワークシートを利用して、グループでの協働 - 時々質問し、話し合いを促す - 意見をホワイトボードへ記入し、可視化する	- 自分達の生活と政治とが直結していることを強調。 - 選択基準は各自の判断に任されることに留意する。 - 自由な意見が発表できる環境設定を行う。 - グループでの話し合いが活発でなければ、座席を替えて話し合いを促す。 - グループでの進行役を指示する。	パワーポイント スライド ワークシート ホワイトボード 赤ペン
まとめ ④ 振り返り 約 10 分	- まとめテスト（投票する人の選び方）（個） - 採点（生徒同士交換）（協働） - リフレクションシートの記入（個）  - 授業の感想、発表	- 展開中に同じ問題を解いているので、ワークシートで確認できる。 - 個人目標を確認できるような内容のリフレクションシートの準備	- まとめテストの交換を行う。 - 採点して返却 - リフレクションシートは前回の意見に対してコメントを記入して返却 - リフレクションシートの回収	まとめテスト リフレクションシート

2 知的障害特別支援学校における高等部社会科の教育内容について

「特別支援学校学習指導要領解説」によると、高等部社会科の意義としては、「中学部の社会科で学んだ内容を更に深め、自分たちの住んでいる地域社会を中心とした社会の様子、働き、移り変わりなどについての学習活動を通して、社会生活をより快適に送るための能力や態度、さらには卒業後の社会生活を送るために必要な様々な能力の習得」を目指している。

また、地域社会の一員としての自覚をもち、生徒の知的障害の状態等に応じた社会的な思考力や判断力の育成を図り、公民的資質の基礎を養うようにすることの大切さにも触れている。さらに、「生徒が社会の中で自立した生活を送るために必要な指導内容を選択、配列すること」の必要性や、「生徒が体験的な学習を通して、これらの内容の生活との関連が分かるようにするとともに、社会生活を営む上で必要な基本的な知識や技能を身に付けることができるようにする」ことの大切さにも言及している。そのため、内容の取扱いに当たっては、「生徒にとって生活に即した分かりやすいものとなるようにできるだけ具体的な内容を取り上げて、指導する必要がある。」と、できるだけ具体的な内容で、指導内容の選択・配列を行うよう規定している。

「特別支援学校学習指導要領」において、社会科の目標は、「社会の様子、働きや移り変わりについての関心と理解を一層深め、社会生活に必要な能力と態度を育てる。」とされている。学習内容については、「集団生活と役割・責任」、「きまり」、「公共施設」、「社会的事象」「我が国の地理・歴史」、「外国の様子」の六つの観点から基礎的な内容と発展的な内容を2段階で示している。

考えられる指導事例としては、「公共施設」が観点となる学習であれば、公共職業安定所（ハローワーク）の機能や役割、立地場所を地図等の資料やインターネットを活用しての調べ学習、更に交通路

線を調べることで、居住地との関係性や、交通機関の乗り継ぎなどのシミュレーションも可能である。ハローワーク職員を学校に招く、あるいは校外学習として実際にハローワークへ行き、求職登録用紙に必要事項を記入する等、卒業後の生活での活用を前提とした授業内容が展開できる。

また、「社会的事象」の観点においての学習であれば、新聞やテレビ放送などで報道される内容を中心とした社会情勢一般のうち、生徒を取り巻く地域における出来事に中心を置き、「2015 年度県内高校生の就職内定率が過去最高」との記事などを取り上げ、グラフの読み取りから 2010 年以降持続的に増加傾向にあることや、高校生や保護者らが早期に就職活動の準備を行っていることも背景にあると気付くことができるであろう。社会一般の出来事に興味・関心をもち自分自身の生活との関連性から、就職意欲を喚起するような内容が展開できる。

3 社会科における言語活動の充実

小原友行（2016）は、中学校社会科における言語活動において育成すべき「思考力・判断力・表現力」とは、社会的事象や問題を「読み解く力」とであると概念規定を行った。更に、思考力、判断力、表現力をばらばらに育成するのではなく、知識・理解や技能、関心・意欲・態度の観点と相互につながっていることが重要であると、観点別目標との関連を図式化して表している（図 1）。既に習得している基礎的な知識・概念・技能を活用して、社会的事象や問題に対する「どのように、どのような」、「なぜ、どうして」、「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」という問いに答えていく力を言語活動の中で育てていくのである。言い換えると、知る・わかるだけでなく、その背景を熟考し、自分なりの意見や考えを持ち、それを表現しながら社会への参加・参画を考える力の育成となる。「主要な 3 つの問いを生徒自身が発見し、それを協働的に探究していく授業デザインが求められる。」と述べている。

軽度の知的障害を有する生徒にとっても、卒業後の生活に必要な最低限の知識、常識を身に付けることが、社会参加、自立には必要である。そのため、社会的事象を読み取り、その内容について話し合い、自分たちなりの解決策を考えていくという授業スタイルを活用することとした。よって、3 つの問いが生徒自身から生まれてくるような授業展開を考えていきたい。

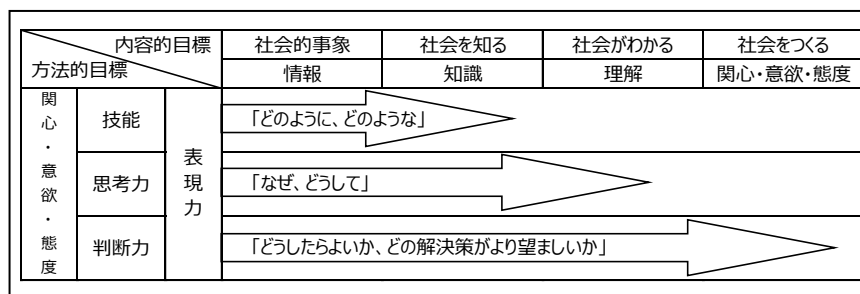


図 1 観点別目標の構造化（小原作成）

III 研究の実際

1 対象学級の実態把握

実態把握には、「自尊感情測定尺度（東京都版）」及び「職業レディネス・テスト」を用いる。社会的能力を把握するためのツールとして、東京都で活用している自尊感情測定尺度の利用、更に社会的職業領域（奉仕活動への興味）及び対人関係思考（人との接し方）などの職業的発達における志向性測定ツールとして職業レディネス・テスト（VRT）を利用したいと考える。自尊感情の傾向や対人関係の志向性を測定することで、クラスの傾向や個人の特徴、支援の方向性を考察していきたい。

(1) 自尊感情測定尺度「自己評価シート」による実態把握

自尊感情を構成する 3 因子を確定し、これら 3 つの観点について質問紙形式で 22 項目の質問から生徒の自尊感情の傾向を把握することとした（表 2）。

表 2 自尊感情を構成する 3 因子（東京都）

A 自己評価・自己受容	B 関係の中での自己	C 自己主張・自己決定
自分の良さを実感し、自分を肯定的に認めることができるようにする。この観点は、教師との関係において影響が大きいことから、教師からの評価や言葉掛けによる効果が期待できる。	多様な人との関わりを通して、自分が周りの人に役立っていることや周りの人の存在の大きさに気付くようにする。学習に対する意欲や良好な友人関係においての影響が大きいことから、学習や友人関係の構築についての支援による効果が期待できる。	今の自分を受け止め、自分の可能性について気付くようにする。学校では進路指導においての影響が大きいことから、キャリア教育などによる指導の効果が期待できる。

実態把握は、対象生徒 7 名に対し、10 月に行った。A B C の 3 つの観点において、個人内評価を比べ、個人毎にグラフの形の特徴から分析を行った（図 2）。3 つの観点において、6 番を除く 6 名

の生徒は、「B 関係の中での自己」の項目が1番高かった。また、1、2、4、7番の生徒は、「A 自己評価・自己受容」での評価点が1番低い傾向を示している。

1、2、4、7番の生徒は、特徴・傾向として、「協調性が高く、集団になじみやすい反面、友達といないと不安になりやすく、数人のグループで行動する傾向」や、「他者の言動に流されやすい傾向」をもつ。また、「自分の短所が気になり、他者と比較して自己を評価する傾向」や、「自分に自信が持てず、自己を否定的に見る傾向」が強くなる。指導の方向性としては、自分の判断や行動に自信を持たせ、自分の良さが感じられる場面や経験を増やし、ありのままの自分を受け入れられるようにする。他者との比較ではなく、自分なりの目標の達成を目指すようにする必要がある。

3、5番の生徒については、「C 自己主張・自己決定」の項目が1番低くなっていることから、「周囲の評価を気にするあまり、自我を抑えすぎて行動できなかつたりする側面」が見られる。そのため、自分の判断や自分で決定することに自信を持たせてあげる必要がある。

6番の生徒については、「A 自己評価・自己受容」が1番高いことから、「もっとよくなりたいという意欲はあるが、他者からの評価や言葉掛けを素直に受け止められない傾向」がある。他者のよいところにも気づかせ、協力して学校生活を送れるよう指導する必要がある。また、「C 自己主張・自己決定」の項目が1番低いことから、他者との比較ではなく、自分なりの目標の達成を目指す支援が有効だと考えられる。

(2) 自尊感情測定尺度「他者評価シート」による実態把握

次に、より適切な自尊感情の傾向把握を行うことを目的に、生徒の自己評価に加え、他者評価による自尊感情の測定を行った。評価者は対象生徒の担任である。24項目から構成されており、観点別に6つの指標に分類できる(表3)。24項目の質問事項に対し、4段階で回答させ観点別に合計点から評価を行う。他者による行動観察により、自尊感情の傾向を把握できるという点において、前述の「自己評価シート」を補完するシートとして考えている。

10月実施の集団平均をグラフに示している(図3)。「③友達との関係」、において落ち込みが大きく、続いて「①人への働き掛け」、「⑥場に合わせた行動」、へと続く。大人との関係は良好に行えるのに対し、友達との関係作り及び人への働きかけについて課題が見られるようである。グループで協働し学習活動に取り組むことで、友達同士の関係性

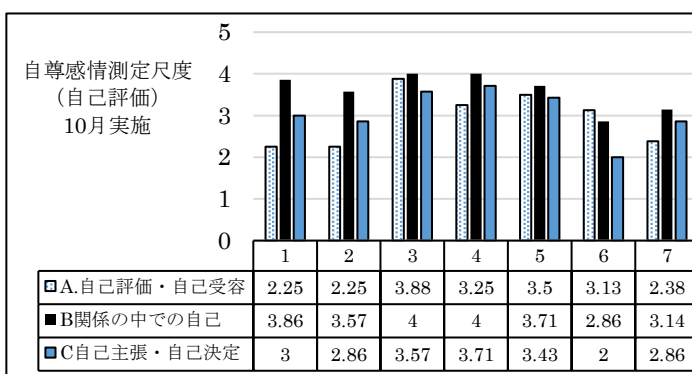


図2 生徒による自己評価(因子別)

表3 「他者評価シート」の評価項目

No	観 点	項目	項目は、学校で把握する場合には、授業中や休み時間などにおける現在の状況について回答してください。			
			あてはまる	どちらかという あてはまる	どちらかという あてはまらない	あてはまらない
1	①人への働き掛け	自分から友達に働き掛ける。	4	3	2	1
2		日常的に交流の少ない相手にも関わる。	4	3	2	1
3		自分の思いや意見を何らかの手段で表現する。 (手段・表情・身振り 言葉や簡単な言葉 補助手段など)	4	3	2	1
4		集団の中で意欲的に行動する。	4	3	2	1
5	②大人との関係	特定の大人を信頼して心を開く。	4	3	2	1
6		大人との関わりを受け入れる。	4	3	2	1
7		自分から身近な大人に関わる。	4	3	2	1
8		友達との関わりを受け入れる。	4	3	2	1
9	③友達との関係	友達のことを考えて発言する。	4	3	2	1
10		友達のことを考えて行動する。	4	3	2	1
11	④落ち着き	自分から気持ちを立て直す。	4	3	2	1
12		これまでできなかったことに取り組む姿勢が見られる。	4	3	2	1
13		一つのことを最後まで取り組む姿勢が見られる。	4	3	2	1
14		自分の行動を自分で決める。	4	3	2	1
15	⑤意欲	肯定的な言葉掛けにより安定する。	4	3	2	1
16		肯定的な言葉掛けにより嬉しそうにする。	4	3	2	1
17		新しいことができると嬉しそうにする。	4	3	2	1
18		肯定的な言葉掛けにより次への意欲につながる。	4	3	2	1
19	⑥場に合わせた行動	相手の要求を受け入れる。	4	3	2	1
20		相手の指示を受け入れる。	4	3	2	1
21		ルールを守って行動する。	4	3	2	1
22		集団の雰囲気になじんでいる。	4	3	2	1
23		集団の活動に合わせて行動する。	4	3	2	1
24		状況に応じて臨機応変に行動する。	4	3	2	1

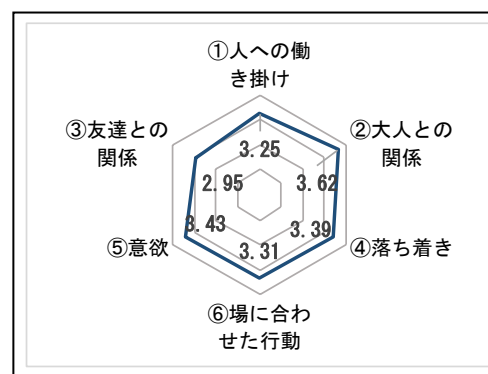


図3 担任による他者評価(10月)

作りを意識させる必要がある。

(3)「職業レディネス・テスト（VRT）第3版」による実態把握

この検査は、職業レディネスの中の職業志向性と基礎的志向性を測定するA、B、Cの3検査から構成されている。A検査は、職業・仕事の内容を記述した54項目の質問からなっており、各質問に対して好みの程度をそれぞれ3段階で評定することにより、職業興味を測定する検査である。B検査は、日常生活行動や意識について記述した64項目からなっており、各質問に対し、あてはまるか、あてはまらないかを評定させることによって、基礎的志向性を測定する検査である。C検査は、職業・仕事の内容を記述した54項目の質問からなっており、各質問に対して、自信の程度をそれぞれ3段階で評定させることによって、職業遂行の自信度を測定する検査である。

10月実施の検査結果において特徴的な項目は、B検査における対人関係志向についてである。「人の役に立つ」「みんなと行動する」の項目で評価点が高かった。クラス全体の特徴を表すために、積み上げグラフで表示する（図4）。対人志向の評価点の高さは、人と直接関わる活動に興味関心が向いていることを表している。具体的には、人の気持ちに敏感で、他人の援助をしたいという気持ちが強いことや、一人で過ごすよりたくさんの人と一緒に行動したい思いが強いことを示している。しかし、「自分を表現する」部分の落ち込みが特に大きい。このことは、人前できちんと意見を述べ、自己表現を行いたいという気持ちが低いと読み取ることができる。

総合的には、人を楽しませたり、援助したりするなど、人と直接関わっていくような活動が好きでありながら、自分を表現することに苦手意識を持っている。

以上の結果から、積極的に協働的な学びの場を設定し、言語活動の充実を図ることで、自分の思いや考えを表現する経験を積み重ねる必要性があると考えられる。

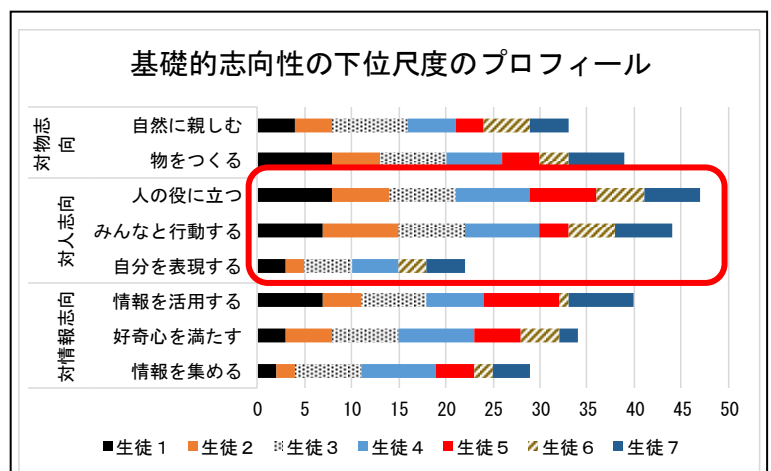


図4 基礎的志向性（B検査）のプロフィール

2 授業実践、検証

授業実践としては、研究授業を2回、検証授業を3回行った。報告書には、検証授業Ⅲの授業計画を記載する。

(1) 使用教科書

「くらしに役立つ社会」 東洋館出版社 特別支援教育中・高等部段階テキスト（図5）

(2) 単元名

「私たちのくらしと経済」

(3) 単元の目標

私たちの生活と経済との関わりについて学習する。品物の生産、流通、交換、消費などの活動のすべてを合わせて経済というが、経済が順調に発展していくためには、それを支える社会のしくみが必要である。しかし、経済の規模が環境へ与える影響も考慮しながら、一人一人が消費生活をしていく上で様々な注意が必要となる。毎日の生活を支える食品の流通及び、電化製品、衣料品、文房具などの工業製品の流通を中心に流通のしくみから、消費者の意識や課題について考察することができる。

(4) 指導計画

「私たちのくらしと経済」の単元における指導計画は、総授業時数5時間とした（表4）。検証授業Ⅲの授業は2時間目の実践である。前時に流通の仕組みについて学習を行っており、流通に関する語句の意味理解も含めて、流通の役割や役目など実際の生活と関連づけながら学習する。



図5「社会」テキスト

表4 「私たちの暮らしと経済」の指導計画

	主な学習内容	ねらい	主な評価の観点
1	生産から消費への流れ～流通のしくみ～ ① 食品の流通	生産物が多くても、流通のしくみが未整備だと、商品が消費者の手元に届かないなど、毎日の生活を支える食品流通の重要性を考察する。 コンビニエンスストアの陳列の工夫など小売業者の視点で消費者の消費行動を考えることができる。	【思考・判断・表現】 流通に関する事例を基に、流通の役割について多面的に考え、その過程や結果を適切に表現できる。
2 (検証目)	生産から消費への流れ～流通のしくみ～ ② 工業製品の流通	物流センターが担う、品物を集め保管する倉庫としての働きと、配送センターとしての働きを理解する。同じ商品であっても、生産工程や流通の違い、製品の質の違いなどによって値段が違ってくることに気付くことができる。流通のキーワードを自分の生活と関連させ再確認する。	【思考・判断・表現】 流通のしくみや流通の合理化のための取り組みについて、グループでの意見をまとめ、発表できる。
3	いろいろな仕事	社会には、いろいろな仕事や会社が存在しており、人々が必要としているものを作り出して提供している産業について、3種類の分類分けから概観する。	【資料活用の技能】 産業の分類分けなど、事例や資料からの読み取りを行い、自身の生活と経済との関連について気付く。
4	経済活動を支える社会のしくみ	社会資本整備や環境問題が私たちの生活と密接に関係していることを考察する。急激な経済成長による自然破壊が人々の健康に悪い影響を与えないよう、省エネルギーやリサイクルについて理解する。	【関心・意欲・態度】 自身の消費活動を振り返って、自立した消費者を目指そうとしている。
5	私たちの消費生活	契約社会の代表的なものとしてクレジットカードのしくみを理解する。消費者金融や悪質商法の例などを提示し、契約トラブルを引き起こさないよう注意喚起する。併せて、消費者保護制度の存在についても学習する。	【知識・理解】 消費者の権利と契約、消費者問題について理解しその知識を身に付けている。

(5) 検証授業Ⅲ（平成29年1月31日実施）

① 検証授業の目標

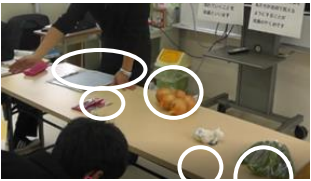
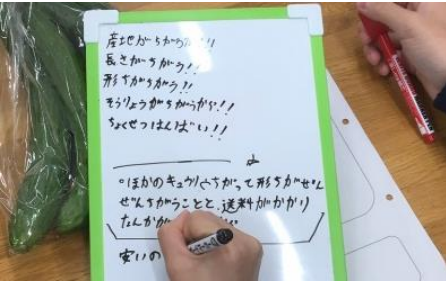
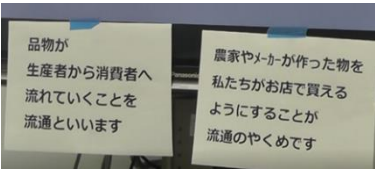
ア 流通の基本的な役目や、関連する語句の意味を理解する

イ 自由な発想で意見を述べることができる。

② 検証授業の授業展開（表5）

表5 「検証授業Ⅲ」の本時の展開

	学習内容	生徒の活動	指導上の留意点	準備物	評価
導入 5分	はじめの挨拶 アイスブレイク 「ETゲーム」 個人目標設定	号令 教師の指示に従い、隣同士指先を合わせる。（協働） 席を立ち数人と指先を合わせる。（協働） 「ET」をする相手を探し 教室を歩き回る。 ペアを替えての挨拶  ワークシートで、今日の個人目標を選択する（個） 隣同士、目標を宣言しあう（協働）	生徒の健康状況の確認 話し合いが持ちやすい雰囲気を作るため、ルールが単純であること、指示が明快であること、行動に移しやすい内容であることに留意 教師の指示に従い、一斉に行動できるような言葉掛けを行う。 可視化し、目標を意識しやすくする	大型テレビ パワーポイント ワークシート	関心・意欲・態度 思考・判断・表現
	食品流通の仕組み（前時の振り返り） 説明 卸売市場の仕組み 流通の役目 目標の再確認	流通とはどのような仕組みだった？ 生産者 → 卸売り市場 → 小売業者 → 消費者 ワークシートに記入（個） 学習発表会でのみんなの立場を考えてみよう！ みんなは生産者？お父さん、お母さんは消費者？ 流通の役目とは何でしょうか？ 生産者→消費者 への流れを作る （お店で買えるようにすること） ワークシートに記入（個） 今日の個人目標を再確認する（個）	社会を知る問い 社会的な知識を得るための問い掛け 語句の意味、確認をしながら説明する 生産者にも消費者にもなり得ることを確認する。 社会を知る問い 社会的な知識を得るための問い掛け。 何のために流通が整備されているのか考察する 目標を再確認し意識する	ワークシート パワーポイント テキスト(p52) ワークシート 販売学習の写真 掲示物 ワークシート	知識・理解 技能（資料活用） 関心・意欲・態度 思考・判断・表現

展開② (20分)	演習 消費者の手に届くまで 値段の違いに気がつく 輸送方法の違い 生産量の違い 原材料、賃金の違い 卸売市場を通さない商品もある グループ意見のまとめ これまでの資料、テキストも活用する 発表	なぜ、同じ物が違う値段で売られているのだろうか？  比べる商品を、グループで1品選択する(協働) 〈グループで意見を出し合う〉(協働) その①《工業製品》 値段に違いが出るのは、なぜでしょうか？ (外国で大量に生産すると単価が安くなる) (安い物は質が落ちる) その②《農作物》 値段に違いが出るのは、なぜでしょうか？ (産地直送、有機栽培、無農薬、大規模農場、機械化、天候) グループで買うなら、どの商品がより望ましいですか？ その理由をまとめてください。 ・グループの意見をまとめる  ・代表者を選定し、発表する	日本製と外国製 産地の違い、輸送方法 質の違い、原材料 ・ファイル(日本製、外国製) ・赤ペン(文房具、100均) ・タマネギ(国産、外国産) ・ニンニク(国産、外国産) ・キュウリ(県産、本土産) 社会がわかる問い 流通の仕組みを理解するための問い掛け 考え方のヒントを少しずつ提示する 社会をつくる問い 実生活に直結する問い掛け グループでの話し合い活動 グループの意見をまとめる時に、進行役を置く 自分たちなりの意見をまとめることができるように、言葉掛けを行う。 意見をホワイトボードへ書き込むことで、可視化を行う。	ワークシート パワーポイント フラットファイル 赤ペン タマネギ ニンニク キュウリ ホワイトボード ペン ワークシート ホワイトボード ペン	関心・意欲・態度 思考・判断・表現 思考・判断・表現 思考・判断・表現 思考・判断・表現 思考・判断・表現
まとめ(10分)	振り返り まとめテスト及び採点 リフレクションシートへの記入 授業の感想、発表	掲示物  流通の役目を答えなさい？(個) まとめテストを採点しあう。(協働) リフレクションシートへ今日の授業の感想を記入する。 数名を指名して感想、意見の発表を行う。	掲示物で確認しやすくする 展開で用いた内容をまとめテストで確認する まとめテストを友達同士交換する。採点し合い返却。 リフレクションシートは、箇条書きや、何を書いてもいいことを確認する。	まとめテスト リフレクションシート	関心・意欲・態度 思考・判断・表現

③ 目標設定に対する生徒の変容

検証授業Ⅰまでの実践では、個人目標の認識が薄いように感じていた。そのため、検証授業Ⅱ以降は、ワークシートの選択肢の中から、態度目標と学習目標について選択し、生徒毎の個人目標を決めた(図6)。個人目標の設定後に、ペアで宣言し合うという取り組みを導入した。単にワークシートで確認するよりも目標を意識しやすくなったと考えている。さらに、授業の途中にも、個人目標を再確認する時間を確保し、生徒自身が目標を振り返り、達成度について意識しやすいよう配慮した。生徒からも、「流通の仕組みは・・・」等、目標を意識した発言が出てきた。

展開①では、「前回の授業内容について、何を覚えていますか？」と質問したところ、「卸売業者」や「生産者」、「消

社会科ワークシート①

今日の個人目標

《態度の目標》

①よく聞く ②考える ③質問する ④説明する ⑤ペアやグループで協力する

《学習の目標》

「商品の流通」について考えを深め、流通の達人を目指す。

①「流通」について考え、意味を自分なりに説明できるようにする

②「流通」のしくみについて理解し、覚える。

図6 個人目標の選択

費者」と発言する生徒もあり、前時に学習した語句をすぐに返答できた。

展開②のグループ活動では、意見が出た際に、ホワイトボードに書き込み、意見が可視化できるよう留意した。ディスカッションの内容を書き込んでおくことで、視覚的に振り返りができ、意見をまとめやすくなったようである。グループの発表では、自分達で代表者を決定することができていた。原産地や、輸送方法、栽培方法、仕入れ方法など様々な意見が出た中から、グループの意見をまとめることができた。最後に「グループで購入するなら？」の問い掛けに対し、キュウリグループは、「数の多い沖縄産のキュウリにします。」、ニンニクグループは国産（青森産）のニンニクを選び、「数は少なくても質がいいと思うからです。」と説明できた。さらに、リフレクションシートへの記入で、本時の学習の振り返りを行った（図7）。個人目標の達成を意識した生徒の活動を取り入れることで、グループ活動が活発になった。

図7 リフレクションシート

④ 検証の結果

話し合い活動に全ての生徒が積極的に参加できていたかということについては、まだ完全とはいえない状況である。グループの人数は各3名であったが、中には、黙っている生徒もいた。

話し合い活動の中で、他者と協力できる力の育成については、グループ内で発言してもグループの意見として反映されない場面も見られることから、他人の意見を傾聴したり、尊重したりする意識がまだ十分に備わっていないと感じた。自らの考えを広げ深める対話的な学びについては、リフレクションシートへの回答などから、「自分の意見を言うことができてよかった。」や、「友達どうし意見が違うことがわかりました。」など、学習内容の深い理解につながっているのではないかと感じた。

グループ活動は、回を増すごとに活発になってきている。自身のグループだけでなく、他のグループへ意見を述べる生徒もいた。また、個人目標を何度も確認することに加え、流通の仕組みや役目について、掲示しておくことで随時確かめができたと考える。

⑤ 検証授業の考察

アクティブ・ラーニング型の授業展開で、個の学習から協働の学習、また個の学習へと学習スタイルを変化させながら授業を組み立てることと、社会的事象や問題に対する主要な3つの問いに答えていくことを組み合わせることで、より深く、課題に取り組む学習が行えているのではないかと考える。しかし、他者と協力できる力などの社会的能力の育成については、他人の意見の聞き方や、グループでの意見のまとめ方等を工夫する必要性を感じる。

IV 研究仮説の検証と考察

1 検査結果からの考察

2月に再度、自尊感情尺度「自己評価シート」及び「他者評価シート」の検査を行った。自己評価については、「C自己主張・自己決定」の項目で数値の増加が確認できた（図8）。個人内評価において、評価点の低かった6番の生徒についても増加が見られた。全てが授業の影響とは判断できないが、個人目標を自分の判断で決定し、振り返りによって目標達成を意識する取り組みの中で、

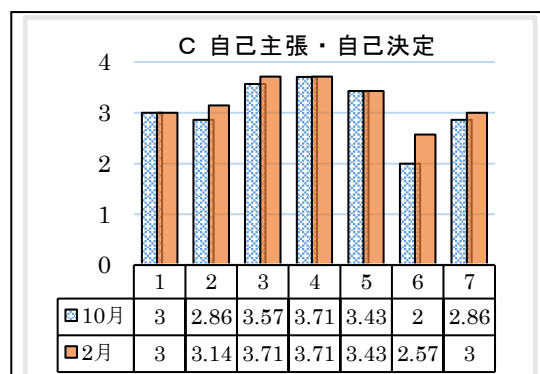


図8 「自己評価シート」(10月と2月の比較)

自信を持つことにつながったのではないかと推測する。

他者評価についても、10月に落ち込みの見られた①人への働きかけ、③友人との関係、において評価点の増加が見られた(図9)。友達と関わりながら学ぶ中で、互いの考えを表現し、認め合える活動などを通して、「できた」、「わかった」との実感を持ち、教師や友達に認められる経験を積むことができたのではないかと推測する。

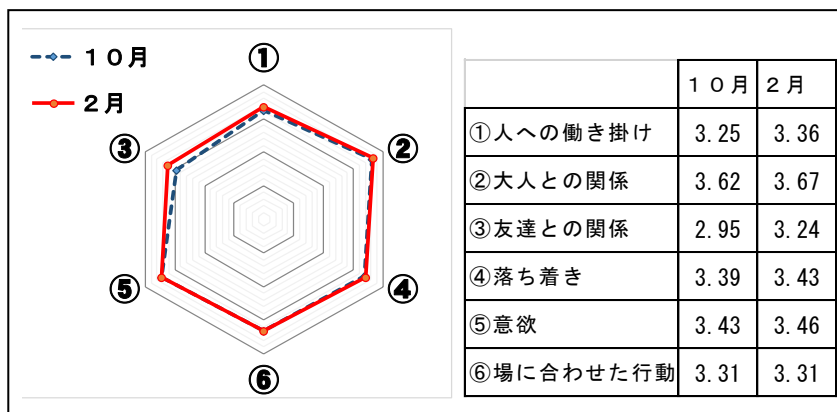


図9 「他者評価シート」の集団平均(10月と2月の比較)

2 研究仮説の検証

仮説1については、学習活動にグループ討議及びグループ意見のまとめ作業等の協働学習を取り入れたため、生徒達にとって当初は戸惑いが見られた。しかし、授業実践を積み重ねる中で、活発な話し合い活動へ発展する場面が増えたように感じた。検査結果からも、「友達との関係」や「自己主張・自己決定」の項目に改善が見られ、発問の工夫やアクティブ・ラーニング型授業を継続することで、他者と協力できる力(社会的能力)の育成に効果があると考えられる。また、ペアワークやグループワークを行うことで、お互いに自己有用感を味わい、協働学習による学びの効果がさらに高まったと考える。よって、アクティブ・ラーニング型授業の実践は、皆が授業に積極的に参加し、皆が意見を言い合うという授業スタイルの確立につながると考えている。

仮説2については、授業の振り返りなどを通して、「学習した内容が分かってきた」という意見も複数あった。対話的な学習の中で他人の意見からの気づきや学びも多かったはずである。他者とのやりとりの中で、互いに影響を与え合いながら、自身の活動を調整し、1つの物事を成し遂げる経験の積み重ねができたと考えられる。自らの考えを広げ深めるための対話的な学習は知的障害特別支援学校の生徒にとっても効果的であるとする。仲間と協力して課題解決することが、将来の仕事において同僚と協力できる力を身に付けることにもつながるため、キャリア教育の視点からも効果的な取り組みであったと考えられる。

V 成果と課題

本研究では、「生徒同士が互いに学び合える授業の工夫」をテーマに知的障害特別支援学校高等部社会科の教科学習における協働的な学習を通して研究を進めてきた。その中で次のような成果と課題を得ることができた。

1 成果

- (1) 知的障害特別支援学校においても、指導内容の工夫や配慮により、互いに学び合う効果的な協働学習が実施できた。
- (2) 発問の工夫や、スモールステップで何度も繰り返すことにより知識の定着が図れた。
- (3) 仲間と協力しての課題解決は、自らの考えを広げ深めるためにも効果的であった。

2 課題

- (1) 学級の支持的な風土作りは、学校の教育活動全体で考えていく必要がある。
- (2) 低学年のうちから協働で学び合う体験を積み重ねる必要がある。経験を積みめば、更に効果的な取り組みが期待できる。
- (3) 他教科でもアクティブ・ラーニング型授業での授業展開が可能だと考える。そのため、職員間での連携、意識の統一を図る。

〈参考文献〉

- 小原友行 2016 『アクティブ・ラーニングを位置づけた中学校社会科の授業プラン』 明治図書出版
- 鈴木建生他 2016 『この1冊でわかる！アクティブラーニング』 PHP研究所
- 小林昭文 2016 『図解 アクティブラーニングがよくわかる本』 講談社
- 小林昭文 2016 『アクティブラーニングを支える カウンセリング 24 の基本スキル』 ほんの森出版
- 西川純 2016 『アクティブ・ラーニングによるキャリア教育入門』 東洋館出版
- 平岩幹男 2015 『発達障害児へのライフスキルトレーニング：LST—学校・家庭・医療機関でできる練習法』 合同出版
- 一般社団法人雇用問題研究会 2015 『職業レディネステスト VRT [第3版]』 独立行政法人労働政策研究・研修機構
- 村田辰明 2015 『社会科授業のユニバーサルデザイン』 東洋館出版社
- 上野一彦監修 2014 『ソーシャルスキルトレーニング (SST) 実践教材集』 ナツメ社
- 溝上慎一 2014 『アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂
- 西川純 2013 『クラスが元気になる！「学び合い」スタートブック』 学陽書房
- 文部科学省 2010 『生徒指導提要』 教育図書
- 小原友行 2010 『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン 中学校編』 明治図書出版
- 文部科学省 2009 『学習指導要領解説 自立活動編』 海文堂出版
- 文部科学省 2009 『特別支援学校 高等部学習指導要領』 海文堂出版
- 文部科学省 2009 『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編 (高等部)』 海文堂出版

〈参考URL〉

- 文部科学省 2015 『論点整理』 教育課程企画特別部会
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf (2016/10/28 アクセス)
- 文部科学省 2015 『生徒指導リーフ Leaf. 18』 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター編
<http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf> (2016/10/10 アクセス)
- 栃木県 2013 『高めよう！自己有用感～栃木の子供の現状と指導の在り方～』 栃木県総合教育センター
<http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/> (2016/12/06 アクセス)
- 文部科学省 2013 『教育支援資料』 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1340250.htm (2016/10/28 アクセス)
- 東京都 2013 『東京都教職員研修センター紀要第12号』 東京都研修センター
<http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/> (2016/10/28 アクセス)
- 国立特別支援教育総合研究所 2012 『特別支援学校 (知的障害) 高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育過程に関する研究—必要性の高い指導内容の検討—』 研究成果報告書
<http://www.nise.go.jp/cms/7,7041,32,142.html> (2016/11/10 アクセス)
- 国立特別支援教育総合研究所 2010 『知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在籍する児童生徒の増加の実態と教育的対応に関する研究』 研究成果報告書
<http://www.nise.go.jp/cms/resources/content/408/b-254.pdf> (2016/11/10 アクセス)